

## 「糖尿病医療学研究会 in おかやま 2019」開催報告

2019年11月23日(土)、奈良県立医科大学医師・患者関係学講座教授の石井均先生、人間環境大学人間環境学部・人間環境学研究科准教授の田中史子先生をお招きして、CDEJ チーム岡山、岡山大学医師会、サノフィ株式会社との共催で、「糖尿病医療学研究会 in おかやま 2019～患者さんのこころの声を聴く～」を開催いたしました。昨年に引き続き第2回目の開催となりましたが、祝日にも関わらず、会場となりました岡山済生会総合病院 管理棟4階「さいゆうホール」には、医師9名、看護師(保健師)28名、管理栄養士6名、薬剤師9名、検査技師1名、不明7名の計60名と、大変多くの方々にご参加いただきました。

まず、教育講演として田中先生に「“患者”としてではない“その人”を見立てるために」と題してご講演いただきました。見立てはまず、自分の心の中を見ることから始まること、自分の心を見るのを妨げる要素として、自分の目(心)の中にある梁(大きな問題)があること、梁は取り除くのではなく持ったまま利用すること、うまくいったと思ったとき、矢は的をはずれているもの、など大変示唆に富む内容でした。続いて、一般講演として、しげい病院糖尿病看護認定看護師の生野友里恵先生より「『注射を打っても病気は治らない』とインスリン注射療法を拒否する2型糖尿病患者の語り」を、岡山済生会総合病院糖尿病内科の勅使川原早苗先生より「1型糖尿病患者の血糖のセルフマネジメントを目指す」をご発表いただきました。どちらのご発表も、多くの医療学的学びを得られる内容であり、フロアでのグループディスカッションも大変活発で、石井先生には「フロアで療養指導とは異なる意見が出ていたことが印象的でした」というお言葉を頂きました。もちろん、石井先生、田中先生には、数多くの大変重要で温かなコメントを頂き、とても勉強になりました。そして、特別講演では、石井先生より「糖尿病医療学一病の経験をケアする」をご講演いただきました。医療学には、疾患の過程のコントロールと、病の経験のケアの2つの役割があること、糖尿病をもつ人への3つのアプローチ(糖尿病について外から観察、糖尿病について内面を知る、糖尿病をもった生き方を知る)についてなど、大変分かりやすくご説明いただきました。勅使川原先生の若い糖尿病患者さんについてのご発表に関連して、ご自身の経験もご紹介下さり、また、若者の成長過程をカブトムシの「さなぎの時代」になぞらえてお話頂き、とても印象に残りました。

今年もあっという間の4時間で、大変実りの多い研究会となりました。昨年、第1回目として岡山に蒔かれた「医療学」の種が、1年間で芽を出し、今回さらにぐっと成長したことを実感できる研究会でした。岡山までご足労頂き、熱心にご指導くださいました石井先生、田中先生、お忙しい勤務の中、発表のご準備をしてくださった生野先生、勅使川原先生、またご参加くださった皆様に感謝申し上げます。来年の「糖尿病医療学研究会 in おかやま」の開催まで、岡山の各地でさらに医療学の芽が成長していくことを確信しております。

(文責 岡山大学医歯薬学総合研究科 総合内科学 小比賀美香子)



研究会終了後の懇親会の様子